

ASD（発達障害）を知るための 「星と波描画テスト（SWT）」

—障害は虐待等の経験に由来するのか、本人の持つ特性なのか—

青木 智子

1. はじめに

「星と波描画テスト（以下、SWT）はドイツの心理学者 Ursula Avé - Lallemand が1970年代に開発した描画テスト/描画法である。10.5×15.3cmの長方形の枠があらかじめ印刷されたA 5版（日本ではメモができるようA 4版用紙の上半分に印刷したものを使用）の専用紙に、鉛筆で「海の波」と「星空」を描いてもらうものである。

SWTは、当初、就学前の幼児のスクリーニングを目的に「発達機能テスト」として用いられてきたが、後に、パーソナリティ特性をも反映することが明らかにされた¹⁾²⁾³⁾。つまり、SWTは発達、パーソナリティテストとしての2つの役割を有する。アヴェ・ラルマン理論に基づく発達機能テストの先行研究は、日本においても軽度発達障害児の発達の研究として各年齢群の発達段階の特徴の検討⁴⁾、基礎研究として児童の発達の視点に言及した⁵⁾ものなどがある。

後の2006年、アヴェ・ラルマンの弟子であるイスラエルの研究者、Dafna Yalon と Ben - Zion は SWT の発達機能テストの側面に目を向け、「障害度のサイン」とした描画上の兆候の検討に着手した。就学前幼児への SWT 実施を繰り返した結果、統計学的に成熟度尺度（M 尺度：The Maturity Scale）、困難度尺度（D 尺度：The Distress Scale）の開発に至る⁶⁾。これらは、心理的判断へのリファーマ

治療が望まれる問題の発見、就学準備への備えを可能にするだけでなく、幼児らの能力と障害を少なくとも5年後まで予測できるというものである。この方法についてヤロン(2006)は、SWTは個別でも集団でも実施でき、一定の訓練を受けた幼稚園教員などが、園児の発達スクーリング手段として実施可能と結論づけた。また、SWTの描画テーマが平易であり、長方形の枠があらかじめ印刷されたA5版はコピーして使用可能であること、SWTのテストバッテリーとして、バウムテスト、ワルテック描画テスト(WZT)を併用した効果についても言及している⁷⁾。

各尺度にもとづくM(成熟度、以下Mと略す:表1)得点、D(障害度、以下Dと略す:表3)得点は、本理論の主要な概念である。

描かれたSWTの全体の構成を見るM得点は、主に就学前幼児らの就学準備の側面、すなわち1年後の学校教育で見られる未熟さ、限局性学習障害、社会性の問題、学業成績に関する高いリスク、4年後に生じるであろう筆跡の問題を予測する。平均値より低い得点は、学習能力の未発達、その背景に発達上もしくは器官的問題の存在を示唆する。課題理解/星の形/波の動き/空間配置/枠の認知/質的水準とする5分類において、非常に顕著である2点、顕著である1点、認められないを0点とし、最大得点計10点、平均値6点以下が低M得点となる。特に波の質は学業成績や社会性の困難さ、書字障害を予測する要素である。これらは、アヴェ・ラルマンが指摘したSWT解釈の5段階、①絵の分類、②空間の構成形式、③空間の象徴的な使い方、④物の象徴に該当する。

一方のD得点は、アヴェ・ラルマンが指摘した⑤筆跡の分析(表2)を踏まえたもので、主に描かれた筆跡(表3)に注目する。これらは、一時的なものも含む「隠された困難・問題」すなわち、特定の時間、場所でその者がストレスに苦しめられていることを示す。具体的には、①身体:軽度の神経症的サイン、筋肉の緊張、不器用なペンの持ち方など、②環境:社会的貧困・生活苦、育児放棄・虐待、離婚や家族の死など、③感情的:外的な要因、例として、恐れ、不安定など精神的問題だけでなく、過保護や完全主義などがあてはまる。5分類されたD得点の分析項目は、さらに21項目に細分化され(表3)、D得点は、非常に顕著である2点、顕著である1点、認められない0点とし、最大得点計42点、平均値5点であり、6点以上が高D得点となる。これらは、一時的に描かれる柔

表 1 成熟度（Maturity）尺度

課題理解	
2点	さまざまな、星と見分けられる形で波の上に描かれている星。関連のある付加物（魚、ボート、月など）
1点	星のみ・波のみ・星が1つだけ大きく中央に描かれている・無関係な付加物（花、蝶、太陽など）
0点	他のものが描かれている・何も描かれていない
星の形	
2点	少なくとも1つの形がよい角のある星が描かれている
1点	動きが悪いため不恰好であるが、計画通りに角のある星が描かれている・丸い星・きれいな円
0点	乱れた形・なぐり描き・形がない・星が描かれていない
波の動き	
2点	少なくとも1つのリズムカルに流れる波が描かれている
1点	綿状またはぎこちない（ジグザグな）筆運びで描かれている・アーチ型に描かれている その他の動きのない形
0点	乱れた動きで描かれている（ときどき波にだけみられる）・波の領域の塗りつぶし・波が描かれていない
空間配置	
2点	良好なマクロ構造で波の上に星が描かれている 一列に並んだ星が波の上に描かれている（5歳児の典型的な描画）
1点	上部に星を描いているが、下部には何も描かれていない 上部には何も描かれていないが、下部に波が描かれている
0点	空間に問題あり：星の上に波がかかっている、または横並びに星と波が描かれている テスト用紙の枠内一面に星が描かれている・テスト用紙の枠内一面に波が描かれている テスト用紙の枠内一面に波が描かれている・枠内の片側にのみ星と波が描かれている
枠の認知	
1点	枠の内側に描かれている、または1つだけはみだしている
0点	2つはみだしている、または枠の外に描かれている
質的水準	
1点	予備特性（持続性、認識、努力、自信または学校でのことを乗り切る助けとなるかもしれない何らかの特徴）
0点	上記のような予備特性の欠如、または、描画を防衛するような要因（怠惰、放棄、怠慢、不活発さ、夢見がちなど）

表2 筆跡のタイプ

	弱い (passives) 感情が働く	強い (negavite) 意思が働く
まっすぐ	繊細 (delicate) (か細い) delicate - fragile	鋭い (sharp) (硬い) (sharp - hard)
ななめ	やわらかい toned (もろい) (toned - spongy)	しっかりした firm (乱雑な) (firm - nough)

注1 () 内が障害の兆候を示す筆跡 (杉浦 2000)⁹⁾

軟性のある要素として、年齢考慮した異なる解釈が可能だが、時に「これらの兆候が長期にわたって筆跡のなかにとどまることがある。その場合は、やがて習慣または後天的な性質となり、単なる兆候からパーソナリティ特性が表現されたものへと発展していく⁸⁾」。つまり、D得点は一時的な困難さだけでなく、就学後、初年度で未学習の基本的技術が蓄積された結果、特定領域に限定して悪い習慣的反応となり、時間を経て特徴的狀態にまで発展した様をも示す。後の長期研究では、D得点が最初の評価で疑われた障害が永続する器官的問題、限局性学習障害の一部として理解できることが明らかにされた。

M・D得点は、値のデータ分析⁶⁾からD得点の減少に伴いM得点が増加する傾向にあり、「テスト得点」はM得点とD得点の数字的な違いと定義できる。よいテスト得点 (高M・低D) は子どもを健康な状態へと導き、テスト得点が悪ければ悪いほど、低M・高Dを原因とし子どもの危険度はより高くなると考えられる。

ヤロン理論に基づく日本国内の先行研究において、5歳児300名 (保育園児) へのSWT実施¹⁰⁾¹¹⁾から、ヤロンと同一のエビデンスを得た。また、改訂版 (日本語版) D尺度を国内の5歳児50名に施行し、その信頼性は0.72であった¹²⁾。あわせて、非定型発達児の子どもに見られる特徴¹³⁾、同一対象者への時系列の事例検討¹⁴⁾、発達障害事例¹⁵⁾、虐待のある子どもへの事例検討¹⁶⁾、性的虐待事例¹⁷⁾などの事例検討も重ねられている。

表3 障害度（Distress）尺度

I. 弱さ：弱さを示す一時的なサイン	
1	ゆるんだ動き
2	ゆるんだ、弾力性のない筆跡
3	か細い筆跡
4	描線の中絶（制御不能で描線が途切れてしまうこと）
II. 未統制の欲動：制御できない衝動の一時的なサイン	
5	もろい筆跡
6	乱雑な筆跡
7	多動性
III. 緊張：緊張の二次的なサイン	
8	狭くなること
9	重なる筆跡
10	萎縮した動き
11	緊張した、弾力性のない筆跡
12	硬い筆跡
13	消すことや加筆による修正
14	黒く固着して描かれること
IV. 過剰補償による統制：過剰補償による統制の二次的なサイン	
15	非常に規則的な配列
16	様式的：テストに対しての形式的な反応
17	線影を描くこと
V. 環境不適應のサイン	
18	不調和な空間：不調和で空虚な領域
19	もつれていること
20	最終段階での遮断
21	荒くすること

2. 目的

本事例の女兒 A（200X 年 5 月）は、小 1 時に虐待を疑われ、小学校からの通報で児童相談所の保護を受け、児童養護施設で生活している。（小 1 時、8 月に

入所、200X+2年、小3時：9歳）Aに約2年に渡って計6回のSWTを時系列で実施し、この子どもの持つ障害が、虐待等の環境に由来するのか、本人の持つ特性なのかをヤロン理論⁶⁾から検討し、明らかにすることを目的とする。ここでの分析は、あくまでM得点・D得点の点数化（粗点：描画表現および筆跡のスコアリング）にとどめ、尺度およびヤロン理論から理解できることに限定することとした。

3. 方法

SWT実施、同時に、ワルテッグ描画テスト（以下、WZTと略す）、バウムテスト、コラージュを実施する。時系列の変化に基づき、当該児の持つ障害のサイン、発達の遅れ等についてヤロン⁶⁾の手法に基づいてSWTを検討する。なお、全てのSWTは客観的評価を得るために、描画テストおよびSWTに熟練した15年以上の臨床経験を持つ4名の臨床心理士が評価した。

4. 事例

施設長の説明によると、当該児小1Aは、初回面接時6歳10ヶ月でありながら、書き取りに誤りが多く、飛ばし読み等の書字に関する困難さが目立った。数字の6と9の区別がつかず、1～10の連続暗唱、数理処理、時計の理解も難しい傾向にある。小1時（200X年6月）に、身体の傷など学校を通して児童相談所（以下、児相と略す）からの通報による一時保護を経て、8月にグループホーム（定員6名：高校・中学生各1名、小学生1名、園児1名。施設長30代男性、社会福祉士=施設員女性2名、20代および50代）入所に至った。なお、本事例は韓国某市におけるものである。

4-1) 児童相談所による記載報告（200X年6月）

WISC知能検査：言語82、作業記憶73、処理85を示す境界水準にあり、軽度ADHDと診断される。本人の養育環境の教育的部分が不足しており、不安による心理的要素の影響が多く見られる。HTP：家屋-樹木-人物画法テスト、

KFD：家族動画法、SCT：文章完成テストからも、「抑うつ、不安が高く自尊心も低く、全般的に不安傾向、不能感を有しているようである。そのため、本人の心理的不安を援助し、円滑な日常生活が送れるよう適切な治療的介入が必要である。」との記載が確認された。

4-2) 家族構成：実父（37歳）・継母（34歳）・本人（6歳：小学校1年生）、実母は離婚し、Aの記憶にない。なお、継母と実父の婚姻開始時期、およびAとの同居開始時等の詳細は不明だが、Aによる「3歳頃から継母と生活を共にしている」という旨の発言が施設の記録に残されている。

筆者（臨床心理士・公認心理師）は施設理事長からの依頼により、3～4か月に1回程度（1週間弱施設に滞在し）、主にAの内面の理解、Aの生活全般をサポートする社会福祉士（施設員）の指導支援を目的に、心理評価と生活支援のためにアセスメント・面接（SWT、バウムテスト、WZT、コラージュ）を実施した。これらの実施は、施設長および管理者（=保護者）との間で文書による倫理的合意を行った。

4-3) 事例の詳細および生育歴：継母が本児と話をせず、無視することを嫌って顔、手足などに身体的暴力を繰り返していた。「お前はお母さんに捨てられた」など言葉の暴力、不潔、食事を与えられないなどの経験があり、あざ、かすり傷の跡も目立つ。継母はAに手をあげたことを認めているが、あざや傷について、「階段から落ちた、アトピーの傷である」と説明している。Aもまた過去の暴力の件について何も話そうとしない。実父も継母とAが会話をしないことを認めており、二人の関係は悪い。Aは家にいる継母が怖く、実父の仕事が終わる夜遅くまで家の外で泣いて待つなどを繰り返していた。家を出て道に迷い、警察に保護されたこともある。

Aは「継母がいなければいい。父親とだけ一緒に住みたい」と話している。一方実父は兎相での継続相談において頻繁に「子どもを育てるのが大変である。施設に送りたい。子どもの養育は困難である」と訴えていた。兎相での一次保護中に実施された心理検査の結果なども踏まえ、発達等の諸問題を克服するためグループホーム入所に至った（以上、施設長および施設理事長からの説明）。

4-4) 施設長による現状の説明(200X年8月): Aは、入所理由や状況を認識はできているが、自分の身に生じていることを表現できないように見える。施設長を父親のように慕って「お父さん」と呼び、小学生としては幼い4歳児程度の甘え方をする。現在のAの家族との関わりは、父方叔母が数回電話をかけてきたのみであった。

- ・感情の起伏が激しく、気に入らないことがあると怒る、他人のものを勝手に持ち出してしまふ。活発で積極的だが、じっとしていられず、作業に集中できない。宿題などは、自分でできないため周囲に聞くが、そのうちにじっとしていられなくなり席を離れてしまふ。後に宿題そのものを忘れて、別のことを始めてしまふ。言われたことを忘れる/学校に鞆を忘れて帰って来た/かたづけなどができない。兎相の報告にもあるように、入所時からADHD傾向(特に多動・衝動性)が著しい。
- ・現在の学校はやや遠いため、送り迎えしている(入所して2か月弱。9月に転校予定。このことが本人のストレスにならないかを心配している)。方向・空間・知覚に問題はない。
- ・人見知りがなく、下校時に知らない人の車に乗るなど状況判断ができないことがある。
- ・施設での食事時間には、不器用でこぼすことが多い。おかずを当人分だけ別に取り分けて、手元に置くなどの工夫をしている。
- ・社会福祉士(施設員)のカバンの中から財布を取り出しお金を盗む、学校で同級生の物を盗む。盗んだものを他の友人に与える、お店から駄菓子を盗み友達にあげるなどの盗癖がある。

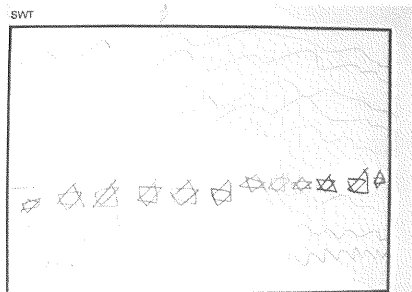
5. 結果

○1回目:200X年8月(図1)

1日目:SWT、baumテスト、WZT、2日目:シールコラージュ¹⁸⁾、3日目:シールコラージュおよびコラージュを実施(各回1時間程度)した。常に1歳年下のBと行動を共にしていることから、Bと同時に実施した。初回のみ

実施時には、<この紙に空の星と海の波を描いてね>という指示に、2分程度

<図1：初回 SWT：200X年8月>



で SWT を描き上げ、その様子を観察していた B が真似するように完成させた。（注：「Cl. の発言」<Th. の発言を示す>）

<海を見たことある？>

「テレビで見たことがあるけど、行ったことはない。」

バウムテスト終了時には、「これやったことがある!」「次は家を描くの?」

（注：児相で何度も描画テストを実施しているため）という発言からもテスト慣れがうかがえた。楽しそうではあるが、どの課題にも集中できず、説明された1つの課題を終わらせると、すぐ紙に落書きして遊びはじめる。課題に集中している B とは対照的であった。

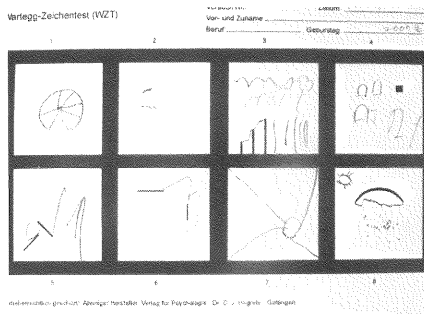
<Aはどこにいるのかな？どこからこの景色を見てるの？>

「ここ（台紙上やや左寄り）」と示す。

結果：星を中央に一行、波はそれ以外の全面にある要点のみの表現だが、課題は適切に理解され、さまざまな星と見分けられる形で波の上に描かれている星がある（M：課題理解）。少なくとも1つの形がある星が描かれ、形の良い星もある（M：星の形）が、波は、線状またはぎこちない（ジグザクな）筆運びで描かれている（M：波の動き）。また、星の上に波が描かれており、空間に問題がある（M：空間配置）。波は枠から2つ以上はみ出している（M：枠の認知）。描画に際して加点要因は特に見当たらない（M：質的水準）。以上のことから、ヤロン理論における M 得点平均6点を下回る **M5点** であり、就学準備の不十分さが推測された。

SWT は全体に形式的（D：No.16、以下、D 得点のサイン項目番号をこれらのように示す）、星と波が規則的に等間隔で（D：No.15）、星と波は重なり（D：No.19）、波はゆるんだ動き（D：No.1）かつ、か細い筆跡（D：No.3）である。星は硬い筆跡（D：No.12）で描かれ、D 得点の基準となる6点を上回り **D9点** であった。明らかな M 低・高 D 得点であり、何らかの問題・障害が描画に認められた。

<図2：初回WZT：200X年8月>



<図3：初回バウムテスト：
200X年8月>

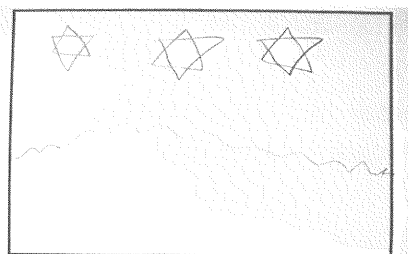


同時実施したWZTに目を向けると、刺激図形を取り込んだ描画が困難であり、Aの精神的な孤立や不適応状態が推測された。物事を主観的に判断し(1枠)、自分を取り巻く環境は天気のように変化があるため、予想できないことが多いと感じているようである。同時に、愛着の問題も見て取れる(8枠)。感情は無意識的になりやすく(2枠)、その感受性は機械的で、今まで学習したパターンを使うことが多いのだろう(7枠)。虐待児は、誤ったコミュニケーション・スキルを学習し、虐待を誘発する言動を繰り返すとされるが、その傾向がここからも見て取れる。どうしたいと思っているか、問題にどう対処するかという意志・能力は乏しく(3、6枠)外的環境に委ねるしかないと考えている、もしくは虐待や障害が意思決定に問題を生じさせている可能性も考えられた(図2)。バウムテストで描かれたのは顕しく不健康な木であり、4歳程度の子どもが描いたような印象を受けた。樹幹、幹のウロ、根のいずれにも問題を有しているようである(図3)。同時実施のコラージュでは、シールコラージュ¹⁸⁾での練習を経ても、まだ「好きなものを選択し、切って、貼り付ける」という作業の流れが理解できないままで、作品について語ることも困難であった。なお、初回のみWZT、バウムテストを提示した。

○2回目：200X+1年3月(図4)

SWT、バウムテスト、WZT、コラージュの順序で実施し、1時間程度を要し

<図4：2回目 SWT
200X年+1年3月>



た。

施設長からの情報：小2になる。同室のBがクリスマス前に退所し、1人部屋での生活が続いている。算数の宿題などを指導していると、2桁の足し算、特に引き算ができず、引き算のマイナス部分に線を入れて足し算の問題にしてしまうなどもあるが、電卓などで繰り返し練習し、進歩が見られる。

また、週1日の訪問個別指導支援（注：社会的養護を必要とする子どもへの福祉的サービスの一環）で算数、国語をマンツーマンで学んでいる。学校内の放課後ピアノ教室・週2回を始めたが、練習の積み重ねや集中して作業に取り組むことの困難さから、1ヶ月後には辞めたいと訴え始めた。常に元気で愛想がよく、近所の人などにも気軽に挨拶し可愛がられているが、どうすれば大人に可愛がられるかをよく理解しているように感じる。

情操教育の一環として、施設で植物を育てさせたが枯らせてしまった。後に「金魚を飼いたい」と、施設長と共に買いに出かけ、餌やりなど育て方も店で習ったが、水槽にはさみを入れてかき回す、水に触る、餌をやりすぎるなどで水槽の水が濁り、金魚は2日で死んでしまった。また、死なせたのは、自分の責任であるという理解はあるがそれを表現できないように見える。

実施時の様子：Bの退所に伴い一人で実施。

<前にもやったことがあるけど、この紙に星と波を描いてね>「うん」とすぐに取り組み、集中して丁寧に描画し、1分程度で終了。お土産に持参したシールを喜び、コラージュでも切片を貼らず、シールを多用する。もらったシールに関心を示すが、そのまま作業を中断し、施設内の子どもにプレゼントしに行くなど、各課題に集中できない。Aがシールを他者に贈る行為は、自分の存在を示すための行動の1つのようにも感じられた。一方で、WZTやコラージュ等でも、描画したものの説明を積極的にテスト用紙に書き込む様子からも、誤字の減少がみられた。

結果：形の良い大きな星が3つ（M：星の形）丁寧に描かれた（M：課題理解）。

空間が目立つ要点のみの描画だが、波は穏やかで（M：波の動き）枠からのみ出しも1つのみである（M：枠の認知）。ただし、空間配置は絵の貧困さ（M：空間配置）からも低い得点結果に留まっている。描かれた絵のバランスも悪くなく（M：質的水準）M 8点と高Mであった。

波は1本線で描かれ、右側は中断された描線（D：No.4）が見られる。テストへの形式的な反応（D：No.16）、引き続き不調和で空虚な領域が目立ちながらも（D：No.18）、D 3点と低D点に留まった。

○3回目：200X+1年5月（図5）

施設長情報：転校するクラスメートのかばんから500ウォン（50円程度）を盗んで、小物を買ひ、袋から出して、別の友達にプレゼントしていた。自分、他人の物の区別がつかないようである。物を盗む→ごまかす→認める、を繰り返し、盗んだものは学校でもらったと説明する。教室内では、隣席の子どものものを盗むことがやめられず、学校の担任教師から呼び出された施設長が指導を受けた。珍しいもの、可愛いものを盗み、拾ったものなども持ち帰っている。施設長がAを叱責すると、それらの行為はさらにエスカレートする。盗んだものは、謝って返す、拾ってきたものは「汚いから元の場所に置いてくるように」と施設長はAに指導している。社会福祉士（施設員）のかばんの中から財布や鍵などを抜き取ることもある。以前と比較すると良くなってきたが部屋の整理整頓が難しい。唯一、連絡をくれる父方叔母の電話番号をなくすため、常に使用する連絡帳に書き込ませたが連絡帳そのものを紛失した。

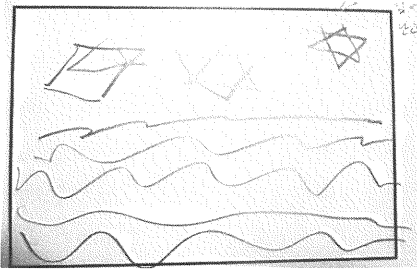
SWTは、前回同様一人で実施。指示すると考えることもなくすぐさま取り組み、1分もかけずに終了させる。

<Aはどこからこの景色を見ているの？>

「ここ（右上の星の上を指し示す：図には矢印で示す）」。Aの示した場所から描かれた景色が見えるとは考えにくく、作業に集中できていないか、意欲がないように感じられる。SWTは、この後に行われるコラージュ等の作業が楽しみで我慢して取り組んでいるのだろう。

結果：課題は理解できており（M：課題理解）、前回と構造は類似しているものの星も波も荒れ、波が優性でマクロ構造が乱されている（M：空間配置）。左

<図5：3回目：SWT
200X+1年5月>



の星は形態が崩れながらも角のある星（M：星の形）が見られ、5本の線の波（M：波の動き）のうち内3本が枠からはみ出している（M：枠の認知）。あわせて、質的水準に加味できるような好ましい表現はみられず M6点であった。

引き続き単純かつ形式的な配列（D：No.15）が乱暴（D：No.6）かつ雑な筆跡で、星が一段と硬く（D：No.12）描かれた。また、全体の鉛筆の動きコントロールが苦手なのか、描線が途切れている（D：No.4）。さらに、制御できない衝動の一次的なサインとも思われる多動性（D：No.7）も見られる。そのため形態と構成が乱れ、D6点であった。

○4回目：200X+1年10月（図6）

施設長情報：3回目直後の5月に虐待児の姉妹（小4・小2）が2週間ほど隣部屋に入所した。後の8月末には、多動と衝動性が顕著で診断・投薬歴もあるAHDHの小4虐待児Cが入所し、Aのルームメートになる。施設内の子どもの動きが著しい時期であった。

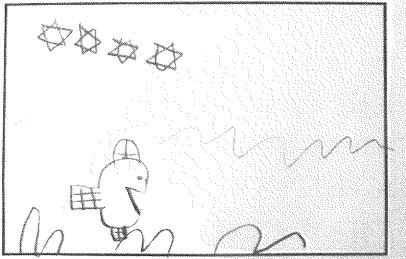
学校行事で出向いた博物館のスタンプ用紙、パンフレットを大量に持参して帰る。友達に贈ると主張したが返却に行かせた。自分のもの、プレゼントされたもの等を他者にあげることが多く、人の関心を買うための行動だと思われる。学習面では、九九ができずに苦勞している。読み書きはやや上達した。

実施時の様子：一人で実施。実施前におしゃべりを楽しみ、作業までに時間を用する。しかし、課題は1分前から終了させた。その後、コラージュ等の実施でも集中できず、途中で止め、画用紙に気ままにシールを貼り付け続けるなど指示とは異なる作業をはじめ。SWTには、初めて星と波以外に魚、海藻などを描いた。

<お魚は何をしているの？>

「飲み物も食べ物もなくなって、2匹いた友達もみんな死んでしまってひとり

<図6：4回目：SWT
200X+1年10月>

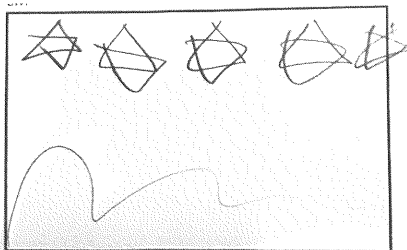


上回った。しかしながら、波と海藻の2つに枠のはみ出し（M：枠の認知）、波はゆるんだ動き（D：No.1）、描線の中断（D：No.4）が見られる。星は引き続き硬い筆跡（D：No.12）だが、付加物がありながらも規則的な（D：No.15）表現で、空間にやや不調和が見られ（D：No.18）D6点であった。

○5回目：200X+2年2月（図7）

施設長情報：ルームメートCとの悪ふざけが目立つ。Cは汚い言葉づかいや多動が著しく、それをAが真似するようになって困惑している。Cは道路の車の影で平気で排尿するなど衝動的な行動、周りが赤面するような性的な発言をも繰り返す。毎日のように問題行動を繰り返し、怒られると部屋に閉じこもり黙り込んでしまう。Cは自身の混乱について自覚があり、Aに日頃から、「そんな時は落ち着くまでそっとしておいて欲しい」と伝えてあるため、Aも関わらないように

<図7：5回目：SWT
200X+2年2月>



ぼっち。」

<お魚は何歳？>「4歳」

結果：課題は十分に遂行でき（M：課題理解）、形の良い星（M：星の形）が初めて左上のみに表れ、右上に空間が残された。やや形式的な傾向だが、マクロ構造も悪くはない（M：空間配置）。豊かな素材を用いて描かれており（M：質的水準）M9点と平均値を

努めている。いずれにせよ、今まで見られなかった行動からも、Aが周囲の他者から大きな影響を受けるらしいことが明らかになってきた。

結果：星が5つ描かれ、波のカーブが大きくなり、形式的ではあるが、これまでとは趣の異なる絵である（M：課題理解）。不格好ではあるが計画通りに角のある星が描かれている（M：

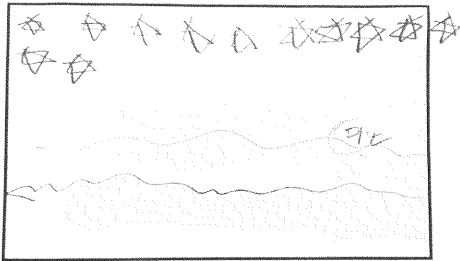
星の形)。波はリズムカル（M：波の動き）、星が波の上に横並びに描かれ（M：空間配置）、初めて星が枠からはみ出し（M：枠の認知）、**M 5点**であった。

星は乱暴（D：No.6）に描かれ、一段と硬く（D：No.12）毎回のように形式的に一列に並んでいる（D：No.15）この表現傾向は全回に一貫して見られ、**D 8点**の結果を得た。

○ 6回目：200X+2年8月（図8）

1か月で退所する子どもが出入りする（ただし、1度退所した場合は再度入所できない）など、施設は落ち着かない状況が継続している。いずれも愛着や発達に問題を抱えた子どもでもあり、Aもまた、落ち着かない様子が継続している。

<図8：6回目：SWT
200X+2年8月>



結果：形式的ではあるが、波の線はアーチに近く2つで示され、ゆるやかに伸びていることから頑張っていることがわかる（M：課題理解）（M：波の動き）。星が波の上に横並び2段に12個描かれ、（M：星の形）（M：空間配置）、星は前回同様枠からはみ出しており、（M：枠の認知）中央の星の形態が悪いものの**M 8点**

と高い数値を示した。

星は乱暴な（D：No.6）硬い筆跡（D：No.12）で表され、いつもながら非常に規則的な配列（D：15）で並んでいる。テストに対する形式的な反応が認められ（D：No.16）**D 5点**であった。D得点は、良くなったり、悪くなったりと変化が多い。この変動の原因はどこにあるのだろうか。

6. 考察および今後の課題

約2年、6回に渡って描かれたSWTを図1、4～8に示した。また、ヤロン理論⁶⁾に倣い、表1には、発達の側面を見る成熟度M得点、障害度D得点の21

項目の危険サインを時系列に得点化した。

初回の SWT は、A が仲良しの1つ年下である B と共に課題に取り組んだ。B が A の様子を観察し、どう描くかを逡巡しているのに対し、A は即座に取り組んだ。それは、B に対するお姉さん意識（年上だから何でも早くできる）とは異なり、課題を終わらずや否や、近くに置いてある画用紙でお絵かきや落書き等をはじめしてしまうなどの態度に象徴される。これらの様子は、SWT のみならず WZT、バウムテスト、コラージュでも観察され、A の他者に対する関心のなさ、遊び等を成立させる他者との約束事を共有し、維持することの困難さを懸念された。この頃の A は、言われたこと、していることを忘れるなど作業記憶の問題、クラスメート全員（20名程度）のいる写真を見て、3分の1程度の子どもの名前と顔しか覚えていないなど社会性の乏しさも施設長が観察している。これらが、診断されている ADHD によるものか、幼稚園や保育園などへの通園経験がなく、社会性に乏しいためなのか、虐待等による学習機会の剥奪、愛着障害等に由来するのかが最後まで判断しかねた。

初回 SWT は M 5 点、D 9 点と危険度が高い低 M 高 D を示した。空間を秩序立てて整理するのが困難なためか、台紙一面に描かれた波は枠からはみ出し、その中央よりやや下に一列で12個の星が煌めいている。課題理解はされているが、空間の使い方が特徴的である。空と海が重なる場合、「子どもはまだ自己中心的で幻想的な考え方を持つ段階にいると推測され、想像と現実、願望的思考と真実情報、そして思考と感情との区別をつけることが難しい、もしくは衝動の抑制が不十分であると考えられる¹⁹⁾」が、まさに A の状況を示した描画であると思われる。低 M 高 D は、A が小学校入学前に心理的評価が必要とされる子どもであることを如実に示している。

ほぼ半年後に実施した2回目の SWT は M 8 点、D 3 点と、要点のみではあるが絵全体が安定傾向に転じ、一見、定型発達を遂げているようにも見えるが、「限局性学習障害の子どもに特徴的な単純さや乏しい表現が著しい²¹⁾」。また、初回とは対照的に空間が多い。投映法的には、何も描かれていない領域に焦点となる問題が反映されると考えられ、A の情緒面に特に注意すべきであることがわかる。親しかった B が退所し、様々な問題を抱えながらも、A は「お父さん」と慕う施

表4：M得点・D得点の変化

1回目		2回目		3回目		4回目		5回目		6回目	
200X年8月		200X+1年3月		200X+1年5月		200X+1年10月		200X+2年2月		200X+2年8月	
M得点	D得点	M	D	M	D	M	D	M	D	M	D
課2	1	2	1	課2	1	課2	1	課2	1	課2	1
星2	2	2	2	星1	2	星2	2	星1	2	星1	2
波1	3	2	3	波2	3	波2	3	波1	3	波2	3
空0	4	1	4	空1	4	空2	4	空1	4	空2	4
枠0	5	0	5	枠0	5	枠0	5	枠0	5	枠2	5
質0	6	1	6	質0	6	質1	6	質0	6	質1	6
	7		7		7		7		7		7
	8		8		8		8		8		8
	9		9		9		9		9		9
	10		10		10		10		10		10
	11		11		11		11		11		11
	12	1	12		12	2	12	2	12	1	12
	13		13	1	13		13		13		13
	14		14		14		14		14		14
	15	2	15	1	15	1	15	1	15	1	15
	16	2	16		16	1	16		16		16
	17		17		17		17		17		17
	18		18	1	18		18	1	18	1	18
	19	2	19		19		19		19		19
	20		20		20		20		20	1	20
	21		21		21		21		21		21
5点	9点	8	3	6	7	9	6	5	8	8	5

注2) M得点：枠の認知：枠の内側に描かれている、または1つだけはみ出している＝1点、2つはみだしている、または枠の外に描かれる＝0点

設長を独占し、信頼できる親代理を得て、安心して甘えられる環境にあったことが絵の丁寧さに反映されたのだろう。この時仲良しのBは退所したもののグループホーム内のダイナミックスも安定し、子どもらもお互いを思いやりながら、まるで姉妹のように生活していた。Aは穏やかにのびのびとテコンドーを習う、ピアノに挑戦する、魚を飼うなど、未知の世界でさまざまな体験をし、集中することや積み重ねの困難さから、失敗と挑戦を繰り返す日々を送っていた。

3回目のSWTはM6点、D7点と、絵全体がかき乱された状態になり、Aの全ての機能に影響を及ぼしている。クラス替え後、小学校の新学期にも慣れはじめ、Aの盗癖がエスカレートした時期である。その都度、父的存在である施設長から繰り返し怒られたことがストレスとなったのか、盗みを繰り返す悪循環にあった。また、施設には母親的役割を担う50代の女性社会福祉士Dがいたが、Aとは折り合いが悪く、福祉士DもAの問題行動に関わらないとする一貫した態度を取っていた。Aは、ウィニコット²⁰⁾のいう、盗癖は自分の攻撃性を親、大人、社会が受け止めてくれるのではないかという期待を持ち、いわば父親代理の施設長を試す行為として、また、自分が当然得る権利がある母親的存在を探し求めているのかもしれない。この時のSWTの絵の乱れは、Aの盗みと彼女を取り囲む、主に人間関係の不安定さに由来するとも考えられる。

4回目には、初めて星と波以外に魚、海藻など、かつて育てていた金魚を彷彿させるSWTを描いた。しかも、4歳である魚の友達は飢死している。魚は集団内での社会的活動、さらに一匹のみの場合は孤独感を示すとされ、Aの姿のようにも見える。この時期、施設には乱暴で騒がしい小4、小2姉妹の虐待児が入所し、皆の注意がこの姉妹に集中していた。姉妹は顕著なADHDでもあり、その多動や衝動性に施設内の子どもが振り回される状態にあった。特に、施設で末っ子とされ、常に可愛がられてきたAにすれば、甘えられる対象である施設長の注目を失い、孤独感を募らせていたとも考えられ、丁寧に描かれた星は自己主張をするかのようである。一方で、問題の盗癖は、4回目実施後の200X+1年12月頃には目立たなくなった。退職した50代女性の社会福祉士Dの後任に、20代女性社会福祉士Eが勤務することになり、分け隔てなく子どもたちに関わってくれたことが、Aにとって唯一の救いであったのだろう。

SWTはM9点と改善傾向がみられ、D6点は停滞し続けている。限局性学習

障害や児相の報告書にもある ADHD とと思われる言動は、本来の A 自身の障害である可能性が考えられるが、虐待やネグレクト、愛着障害など乳幼児期からの生育歴に由来するとして検討すべきとも思われた。齋藤²¹⁾は、虐待が引き起こしやすい症候や現象として多動・衝動性をあげ、虐待によって高まった衝動性の一面をあらわす症状であり、ADHD の多動・衝動性との区別が難しいと指摘する。また、虐待を受けた子どもはどのように愛着を求めてよいかわからず混乱行動をとる傾向があり、絶えず他者（とりわけケア・ワーカー）を試し続けたり、他者に対して心を閉ざして決して甘えようとしなかったり、反対に誰彼かまわず愛着を垂れ流すとし、この背景にある強い愛着欲求を指摘している。虐待児である A は入所初期から人見知りがなく、下校時に知らない人の車に乗ってしまうなどの状況判断の困難さが指摘されていた。金魚を飼ったものの、餌をやりすぎ、水槽の中をはさみでかき回すなど均衡を欠いた攻撃性から、たった 1 日で失ってしまった。これらの状況も踏まえると、ADHD と診断された A の傾向は、持って生まれた障害だけでなく愛着障害によるとも考えるべきなのかもしれない。

5 回の SWT は、M 5 点、D 8 点といずれも基準値以下の値を示した。この時期、ルームメイト C を得て、C と共に悪ふざけに興じるようになり、社会福祉士の仕事や指導が増加した。気ままな C の言動が悪いモデルとなったのか、騒ぐ、はしゃぐなど落ち着きのなさが目立つようになった。これまで、他者に興味を持たなかった A に何らかの変化がもたらされたようである。

さらに 6 回目には、M 8 点、D 5 点と M 得点が向上しているが、いずれにせよ、M および D 得点の変動が激しく、2 年に渡る SWT においても、高 M 低 D を維持するに至っていない。

M 得点は、5 → 8 → 6 → 9 → 5 → 8（平均 6.83）と変化が見られた。初回の就学準備を示す M 得点は 5 点（低得点：低 M）であり、6 点以下の子どもたちは統計的に学業面で成功する可能性が低い。このことから、すでに小学生の A には、学業成績に関する高リスクなどの就学準備に問題があったと考えられる。

SWT は 4 回目を除き要点のみの平凡な、創造性に欠けるテストの貧困化が認められる。描画上の問題は、特に絵の構造を示す空間象徴、枠のはみだしに集中しているが、これらは厳しい規則と集中が必要とされる学校生活への適応を示すものである。A は、多動・衝動性の高い傾向を持ち学校において他者との関わ

り等に、社会性の問題を示した。グループホームにおいては、その時、そのときの他者とのダイナミクス・関りに影響を受ける傾向が推測された。

さらに M 得点は将来の書字水準や、書字原則の概念的的理解における困難さも予測するが、その限局性学習障害傾向は小学校 1 年の段階で認められた。実際に 2 年後の A は、基本的な書字、読字問題だけでなく、10以上の数字の暗誦が難しく、足し算・引き算も苦手としていた。このことから、A の将来の限局性学習障害傾向が SWT に示されていることがわかる。

D 得点は、9→3→7→6→8→5（平均6.33）と変化が生じている。D 得点は特に、手がきの 3 要素（動き、形、空間象徴）に特徴づけられ、なんらかの困難・問題を抱えていることを示す。これらの兆候が長期に渡って筆跡の中に留まる場合、習慣または後天的な性質となり、単なる兆候からパーソナリティ特性が表現されたものへと発展していく。A の D 得点の永続的な高 D は、彼女の有する困難さや問題が徐々にパーソナリティ特性として定着していることを懸念される。

障害のサインは、ストレスや苦悩を抱えている時期には多くの兆候が SWT に表れ、その危機的な状況を乗り越えればそれらが消失するとされる。そのサインの原因として、環境ネグレクト、離別、虐待などがあげられるが、A にはその全てが該当する。2 回目の低 D は、グループホームに慣れ、安心して生活できた結果とも推測されるが、この点からも高 D は、置かれた環境に依存的な A の傾向とも理解できる。あわせて、A の障害が愛着障害に由来するの否かは区別できかねたが、SWT を通して、小 1 の段階で A の発達機能の問題が予測できたことに注目すべきであろう。

7. おわりに

ここでは、他のテストも並行実施したが、特に SWT のヤロン理論における A のモニタリング、D 得点・M 得点（粗点）を主に SWT の検討を試みた。その結果、SWT の D・M 得点の揺れから、A が置かれた環境において影響を受ける傾向にあと推測された。これは、他者に対する興味のなさが、C の登場により、望ましいか否かは別として、行動を真似る、配慮するなどの態度・行動の変化に

も明らかである。ここから、安定した環境が障害度を低めていることもわかる。

あわせて、2年以上に渡って公的な就学および心理的サポートを受けながらも、就学準備は不十分（M得点）であり、Aの発達の遅れは習慣として彼女に定着しつつある（D得点）こと、単なる兆候がAのパーソナリティ特性へと発展していることも推測された。これらのSWTの経過は、Aのメンタルマップとしての意味をも有し、Aの心象が反映されたものとも理解できる。

今後も継続して心理的援助を行いつつ、AのSWTの変化を辿ることで、ヤロン理論、および、就学準備、発達障害について検討していきたいと考える。そもそも、発達障害と虐待や生育歴に由来する愛着障害の区別は非常に難しいことから、そのためにも、SWTとWZTやバウムテストなど他のテストとの比較および併用、有用性の検討、多くの事例の分析が求められよう。

また、筆跡分析については、まだまだ欧州以外では馴染みがないため、今回はヤロンからの指導を得た経験を持つ熟練者によってスコアリングを行った。しかしながら、誰もが平易に筆跡を客観的に得点化できる工夫がSWTの活用を広めることにつながると考えられる。

*なお、本稿は、青木智子・杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太 2016 幼児の星と波描画テスト（SWT）—そのIII—被虐待児の事例 発達の遅れは一時的か永続的か— 日本心理臨床学会第35回大会を踏まえ、SWTの実施を継続しまとめたものである。

文献

- 1) ブルーノ リーネル、杉浦 京子、鈴木 康明 2000 星と波テスト入門 川島書店
- 2) 香月 菜々子 2009 星と波描画テスト—基礎と臨床的応用 誠信書房
- 3) ウルストラ・アヴェ＝ラルマン 投影描画法テスト研究会編 小野 瑠美子訳 2003 星と波テスト 川島書店
- 4) 大徳亮平・西村喜文 2005 描画テストにおける軽度発達障害児の発達の研究—星と波テストとワルテック描画テストを用いて— 西九州大学・佐賀短期大学紀要36号 pp. 59-69
- 5) 小原春香、小早川久美子 2013 児童を対象とした星と波テストの基礎研究 広島文

教女子大学心理臨床研究 Vol. 4 pp13-19

- 6) Dafna Yalon 2006 The Star-Wave Test Across the Life Span : Advances in Theory, Research and Practice 星と波描画テストの発展—理論・研究・実践:アクロス・ザ・ライフスパン:星と波描画テストの発展 理論・研究・実践:アクロス・ザ・ライフスパン(杉浦京子監訳 2015) 川島書店
- 7) 前掲書6) pp.7-9
- 8) 前掲書6) pp.159
- 9) 杉浦京子 2000 「日本における星と波テスト」リーネル・杉浦京子・鈴木康明 星と波テスト入門 川島書店 111-149
- 10) 杉浦京子・金丸隆太・鈴木康明・青木智子 2016 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その I —Yalon の発達成熟度 (M) 尺度と障害度 (D) 尺度— 日本心理臨床学会第35回大会
- 11) 杉浦京子・金丸隆太・鈴木康明・青木智子 2017 幼児の星と波描画テスト (SWT) 改良版 D 尺度の試み—その I —保育園児の場合— 日本心理臨床学会第36回大会
- 12) 杉浦京子・金丸隆太・青木智子・小松昭吾 2018 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その II —Yalon の発達成熟度 (M) 尺度と障害度 (D) 尺度— 日本心理臨床学会第37回大会
- 13) 小松昭吾・杉浦京子・金丸隆太・鈴木康明・青木智子 2019 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その III —非定型発達児の特徴— 日本心理臨床学会第38回大会
- 14) 小松昭吾・杉浦京子・金丸隆太・鈴木康明・青木智子 2020 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その IV、—同保育園児の8か月後の SWT に見る発達成熟度と障害度の比較— 日本心理臨床学会第39回大会
- 15) 金丸隆太・杉浦京子・鈴木康明・青木智子 2016 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その II —発達障害のある事例— 日本心理臨床学会第35回大会
- 16) 青木智子・杉浦京子・鈴木康明・金丸隆太 2016 幼児の星と波描画テスト (SWT) —その III —被虐待児の事例 発達の遅れは一時的か永続的か— 日本心理臨床学会第35回大会
- 17) 青木智子 2017 性的虐待を受けた子どもの事例—星と波描画テストの経過— 第49回日本芸術療法学会学術大会
- 18) 青木智子 2014 コラージュ療法における新しい導入の試み～診断の技法としての「シールコラージュ」の活用～ 平成国際大学論集 第19号 81-98
- 19) 前掲書6) p.51
- 20) ウィニコット著 橋本雅雄監訳 1987 子どもの治療相談 2 反社会的傾向・盗みと愛情剥奪 岩崎学術出版社 pp.227-231
- 21) 齋藤万比古 2015 子どもの精神科臨床 pp93-95 星和書店